

国際交流基金2011年度を振り返る

国際交流基金は2011年度も、日本の芸術、舞台、出版や映像、生活文化を海外で紹介し、日本語を通して日本に親しみを感じてもらうための事業や、知的交流や日本を研究する専門家同士の交流など、多くの事業を展開しました。ここでは、それらの事業の一端を写真で紹介します。



世界の美術の祭典に参加する

撮影：Ufer! ©Tabaimo/Coutesy of Gallery Koyanagi and James Cohan Gallery

国際交流基金はヴェネチアなどの国際美術展や建築展の日本側主催者を務めている。第54回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展日本館では、東芋(たばいも)の作品を紹介した



「日本の技術」を「日本の文化」の視点で

カナダ文明博物館で開催された日本特別展「JAPAN: Tradition. Innovation」のオープニングで。日本の最先端技術やデザインが江戸時代からの伝統文化をルーツにしていることなどが紹介された展覧会だった 写真提供：在カナダ日本国大使館



街ぐるみの交流で日本の文化を肌身で感じる

地域の秋祭りに参加する関西国際センターの研修生。近隣自治体や国際交流団体の協力を得て、日本の文化・社会への理解を深めるために各種プログラムを実施している



伝統楽器のハイブリッドな演奏スタイルを中東へ

クウェートとヨルダンの2カ国で行った、若手太鼓奏者の上田秀一郎、バイオリンの須磨和声、サクソフォンの田村真寛の3人のユニットの音楽公演。アラブの打楽器タブラに通じる、和太鼓の迫りに会場は熱気に包まれた



文化とともに学ぶ日本語

ロシア、ウクライナ、カザフスタンで行われた日本語講座。日本人書家によるデモンストレーションを通して、日本の文字の美しさを学び、日本語と日本文化に関する理解を深めた



地方料理の魅力を紹介

パリ、アウグスブルグ(ドイツ)、ストックホルムの3都市で、琉球料理の伝承者山本彩香氏がデモンストレーション。気候の異なる地の料理に高い関心が寄せられた



アジアの未来を語り合う

日中韓3カ国の若手知識人が参加する「日中韓次世代リーダーフォーラム」の10周年を記念して、今後の日中韓関係を議論する特別フォーラムを開催した



日本の文芸を世界に紹介するキーパーソン

山岡荘八著『徳川家康』25・26巻の中国語版『徳川家康 13』を翻訳した岳遠坤氏が、第18回野間文芸翻訳賞を受賞。日本文学の研究者として期待されている



日本語学習者が研鑽の成果を発表

第52回を迎えた外国人による日本語弁論大会。予選を勝ち抜いた12名が日本での生活などを通して考えたこと、感じたことを、ユーモアや感動を交えて披露した



海外の文芸ファンと交流

ロシア・モスクワの図書館「non/fiction」展に、世界的人気を誇る『リング』の著者、鈴木光司氏を派遣。講演を行い、現地のメディアからのインタビューに応えた



海外の人と日本の美術家が「共につくる」

インド・ビハール州の農村部にあるニランジャナ・スクールを舞台に繰り広げられた芸術祭「Wall Art Festival 2012」。日本とインドの気鋭の美術家が村人や子ども達にアートの力を伝えた。遠藤一郎×浅井裕介による「未来への象」撮影：三村健二